

授業科目名： 風土と内発的発展	教員の免許状取得のため の 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：鬼頭 秀一 担当形態：単独
実務内容 (実務家教員の場合)			
科目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校 社会）		
各科目に含めることが 必要な事項	教科に関する専門的事項 地理学（地誌を含む。）		
<p>「学位授与の方針」との関係 A、B、C、Dが関連している。 A:生命を基本として歴史として捉え、地域社会の問題を矯正から捉え直すためには、生命科学の自然科学的な知識を基礎にして、人文社会科学の知識を統合的に捉える必要がある。 B:また、そのように、専門知や統合知を地域社会の内発的発展のために使うことは問題解決のための知の実践性と関係がある。 C:さらに、「生命」を基本として、地域社会における他者と共感を持ち理解することが重要である。 D:そして、「生命」を基礎として内発的発展を考えて行くためには、共感理解した他者を認め、排除しない社会的公正を実現することが大事で、その上で、多様な人たちが協働して仲間を作って行くことが必要である。そのための基本的なあり方を学ぶ。</p>			
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>(1) 日本や世界の地域のさまざまな事象を位置や空間的な広がりとのかわりごととらえ、それを地域の規模に応じて環境条件や人間の営みなどと関連付け、その地域的特色や地域の課題をとらえるための基礎として、「風土」という視点から考察することの重要性について、理解する。</p> <p>(2) 人間が自然の一部であることを認識することで、それぞれの地域での人間の営みと環境との関係、その中の地域的特色や地域的課題の認識を深いところからとらえ、地域の「内発的発展」の意味について理解する。</p> <p>(3) 災害に代表される環境変動に対して、それぞれの地域で、地域の自然的条件に対応して、社会的、文化的な対応も含めた形で、人間が今までどのような形で対応してきたのかを理解し、「防災」という人間の取り組みのあり方について考察し理解する。</p> <p>(4) 従来の「近代化」というとも含めた、社会変動に対して、それぞれの地域が、地域の自然的・社会的・文化的状況を踏まえてどのように対応してきたのかを理解し、「伝統の再創造」という視点から、自然に根ざした形で「伝統」を組み替えて行くあり方について理解する。</p> <p>(5) 地域における広い意味での「教育」ということに着目し、自分たちが生活している身近な地域について、その自然的条件、社会的状況、文化的なあり方を含めて、自ら主体的に調べて課題を意欲的に追究するあり方を醸成するための、内発的な持続可能な開発のための教育（ESD）について理念的、実践的に理解する。</p>			

- (6) グローバルな多様性のある生活・文化について理解し、それぞれの地域での地域的な課題を解決し、国際的な形で協力するにあたって「風土」と「内発的発展」、「内発的ESD」という視座が重要であることを理解する。

授業の概要

日本や世界の地域のさまざまな事象を位置や空間的な広がりとのかかわりでとらえ、それを地域の規模に応じて環境条件や人間の営みなどと関連付け、その地域的特色や地域の課題をとらえるための基礎として「風土」という概念を、和辻哲郎以来なされてきた議論を俯瞰する。

この概念は人間が自然の一部であることを認識することで、それぞれの地域での人間の営みと環境との関係、その中の地域的特色や地域的課題の認識を深いところから捉えるためにも重要であるが、講義ではさらに鶴見和子が提唱した「内発的発展」に着目し、それについて今まで議論されてきたことを改めて捉え直す。

そしてもう一つ重要な論点として「教育」という視座から捉え直す。この「教育」とは学校等の公教育のみならずノンフォーマル教育、インフォーマル教育も含めている。持続可能な開発のための教育（ESD）が提起されて15年近くなるが、その意味について理解する。

その上で、具体的な地域を題材にして、「風土」「内発的発展」「教育」という視座から持続可能な地域社会のあり方をどのように捉えるべきか考えてみる。

具体的に取り上げるのは、宮城県南三陸町歌津伊里前地域、宮城県綾町上畑地区、山形県西川町大井沢地区、千葉県市原市八幡地区と上高根地区、熊本県水俣市の5箇所である。それぞれ、災害に代表される環境変動の中で、「近代化」も含めた社会変動の中で、それぞれ、その自然的条件、社会的状況、文化的あり方、経済的な側面のそれぞれにおいて、環境変動や社会変動に対して対応していくあり方について検討する。

その中で、南三陸町で見られるように東日本大震災のような災害に代表される環境変動に対して、それぞれの地域で地域の自然的条件に対応して、社会的、文化的な対応も含めた形での「現場の力」が顕在化されることで、災害に立ち向かい、また復興に向けて取り組んだあり方が展望される。その中で人間が今までどのような形で対応してきたのかを理解した上で、今日的課題である「防災」という人間の取り組みのあり方について考察する。

社会変動に対しては、綾町では自治公民館活動を軸に、「自治を育ててきた」あり方と「伝統の再創造」によってそれを乗り切り、ユネスコエコパークに登録され、持続可能な地域社会を経済的な観点からも実現させた姿が垣間見られる。西川町の大井沢地区では「自然学習」を軸にして地域に根差した「共育」という方向が示される。また市原市では「講」という地域の共同性のあり方が重要なものとして存在している。

水俣は鶴見和子が内発的発展論を再構築したことで重要である。また当然のことながら、水俣病という公害という持続不可能な発展をしてしまった地域でもある。その一方で、「もやい直し」「地元学」という取り組みから、負の遺産から出発した内発的な発展に基づいた新しい環境都市が実現している。その取り組みの全体の意味を問い直す意味も重要である。

このように5箇所の事例を検討することで、地域の持続可能性とは何かということ、具体的な事例を分析する中から考察する。

この中から改めて、「内発的発展」について問い直し、自分たちが生活している身近な地域について、その自然的条件、社会的状況、文化的なあり方を含めて、自ら主体的に調べて課題を意欲的に追究するあり方を醸成するための、内発的な持続可能な開発のための教育（ESD）について展望する。

そしてグローバルな視点から、そもそも多様性のある生活・文化について理解し、それぞれの地域での地域的な課題を解決することはいかに可能かについても考え、「風土」と「内発的発展」、「内発的 ESD」という視座が、国際協力も含めた、人と人、人と自然との「共生」というあり方を展望する。

授業計画

- 第1回：人の生活や産業がそれぞれの地域の自然環境に深く関わっている「風土」という概念
第2回：地域の「発展」の「持続可能性」と「持続不可能性」を捉える視座
第3回：内発的発展論（鶴見和子）を捉え直す
第4回：持続可能な開発のための教育（ESD）を、ノンフォーマル教育、インフォーマル教育も含めた広い意味での「教育」から捉え直し、内発的発展論の教育的な意味を考察する
第5回：発展の「持続不可能性」を水俣から見つめる—鶴見和子の内発的発展論の再構築
第6回：水俣の「もやい直し」と環境都市水俣の構築と「地元学」
第7回：東日本大震災という災害の危機が顕在化させた「現場の力」とは—南三陸町歌津伊里前から
第8回：伝統的な組織である契約会と、自然学校を基礎にした RQ との協力に見られる現場の協働のダイナミズムと、ESD と内発的 ESD
第9回：「自治」を「育む」生活世界から内発的発展を探る—綾町
第10回：ユネスコエコパーク綾の登録とその取り組みから経済も含めた持続可能性を探る
第11回：「三山講」と地域の共同性—「講」という伝統的な組織と持続可能性—市原市
第12回：「自然学習」の創造と地域に根ざした共育を考える—西川町大井沢地区
第13回：生活世界からの再創造はいかに可能か—生活世界の教育・学習理論のあり方
第14回：「持続可能な開発のための内発的な教育（内発的 ESD）」とは何か
第15回：内発的発展論の再考と内なる持続可能性の構築—グローバルな視点へ
定期試験

テキスト

- (1) 岩佐礼子 (2015) 『地域力の発見—内発的発展論からの教育再考』藤原書店

補助動画教材

持続可能社会創生学⑤⑥⑧⑩

https://www.youtube.com/playlist?list=PLwrsvYhJb8rKKLwM-kh2_e8T9Ozs-VtDt

参考書・参考資料等

- ①坪内俊徳・保屋野初子・鬼頭秀一『人と自然が共生する未来を創る』星槎大学出版会、2018年。
- ②鶴見和子・川田侃『内発的発展論』東京大学出版会、1989年。
- ③『コレクション 鶴見和子曼荼羅』全9巻、藤原書店、1999年。
- ④中村桂子・鶴見和子『〈新版〉四十億年の私の「生命」—生命誌と内発的発展論』藤原書店、2013年。
- ⑤和辻哲郎『風土—人間学的考察』岩波文庫、1935年。
- ⑥オギュスタンベルク『風土としての地球』筑摩書房、1994年

学生に対する評価

レポート評価（50%）、科目修得試験（50%）を総合して評価する。